

富山・東木津遺跡(第二号)  
ひがしきづ

- 1 所在地 富山県高岡市木津・佐野
- 2 調査期間 一九九八(平10)年六月～一九九九年四月
- 3 発掘機関 高岡市教育委員会
- 4 調査担当者 荒井 隆
- 5 遺跡の種類 集落跡・官衙跡
- 6 遺跡の年代 弥生時代～中世
- 7 木簡の釈文・内容

東木津遺跡は、高岡市中心部、小矢部川と庄川に挟まれた、標高一～一二mの微高地上に位置する。古代における本遺跡は、八世紀後半～九世紀前半を主体とし、九世紀末まで存続したと考えられる。遺構は掘立柱建物二〇棟・護岸施設や橋梁遺構を持つ自然流路(SD二〇五)・道路二条などがある。遺物は土師器・須恵器や、斎串などの木製品などである。墨書土器は、本誌第二一号で紹介したもの以外に、「川相」「大」「平」「舩木」がある(なお、報告書〔関係文献参照〕では遺構番号を整理し、SD二〇五はSD六〇と改称している)。今回は本誌第二一号で紹介した木簡八点のうち、保存処理後に墨痕がはっきりし、また高岡市万葉歴史館の川崎晃氏のご指摘により、訂正があった木簡二点(1)(2)、新たに判明した木簡一点(3)について報

告する。またSD六〇からは漆紙文書も出土しているので、あわせて掲げる。

遺物包含層

- (1) ・「氣多大神宮寺涅槃浄土紙布米入使」  
・「□曆二年九月五日廿三枚入布師三□」  
154×21×5 011(1)\*
- (2) 「はルマ止左くや古乃は□」  
250×34×15 011(2)

SD二六〇

- (3) 「>□子四斗」  
28×17×3 033

(1)は、本誌第二一号掲載時点では、表面の「氣多大神宮寺」の部分がはっきりと釈読できず、伊勢神宮を想定していたものである。氣多大神宮寺は、石川県羽咋市寺家に所在し、能登国一宮である氣多神社に付属する神宮寺と考えられる。高岡市伏木にも越中国一宮の一つである氣多神社があり、そちらである可能性もあるが、『文徳天皇実録』斉衡二年(八五五)五月辛亥条に「能登国氣多大神宮寺」と見え、また神宮寺の規模も勘案すると、能登国の氣多神社と考えるのが穏当である。「紙布」は、一文字で紙の異体字である可能性(本誌第二二号)の他、二文字で「紙布」と理解する見方もある(川崎論文参照)。裏面の「□曆」の年号は、残画とスペースの関

係から、「正暦」の可能性がある。正暦二年は西暦九九一年にあたる。「布師三□」は、人名と考えられる。「三□」の「□」は、門構えが確認できる。越中国射水郡には布師郷が存在しており（和名類聚抄）、高岡市須田藤の木遺跡出土木簡（本誌第二号）、本木簡に書かれた人物は、この布師郷に由来する人物と考えられる。

(2)は、難波津の歌の下句である。難波津の歌は、『古今和歌集』の仮名序に、手習い歌として記される著名な歌である。第二字目の片仮名の「ル」は、平安時代初期の訓点資料にみられる。「□」は「七」あるいは「奈」であると考えられる。木簡の年代は、遺跡の存続時期と書体から、九世紀後半から一〇世紀前半の間と考えられる。

(3)は、物品名と量を記す。本誌第二号で紹介した(9)「<□□一石一斗カ」や、(10)「<白□」などと形態が類似することから、種名を記したものである可能性がある。

#### 漆紙文書



いずれも須恵器杯A内面に付着した漆紙文書である。□縁部周辺

の、漆樹脂が紙に薄く皮膜している部分のみ文字が確認され、杯内部のものは、漆樹脂が多量に付着し、文字の有無は不明である。いずれも紙の表面が下になっており、上部から見ると鏡文字になっている。判読できた文字はBの墨界線と「大」のみである。

なお、木簡・漆紙文書の釈読は、奈良女子大学の館野和己氏、奈良文化財研究所の渡辺晃宏氏・吉川聡氏・馬場基氏による。また、本稿の作成にあたって、川崎晃氏からご教示いただいた。

#### 8 関係文献

川崎晃「越」木簡覚書―飛鳥池遺跡出土木簡と東木津遺跡出土木簡―」〔高岡市万葉歴史館紀要〕一一二〇〇一年

高岡市教育委員会『石塚遺跡・東木津遺跡調査報告』（二〇〇一年）



（荒井 隆・岡田一広）